

高校の校則に対する主観的認知と大学デビュー行動の関連

問題と目的

高校から大学への進学は、生活環境や人間関係が大きく変化する転換期であり、学生には新たな環境への適応が求められる。大学入学期には、勉強や進路に対する不安が高まりやすく（丹羽，2005）、自己決定を求められる一方で、適応に失敗すると人間関係から回避的になりやすいことが指摘されている（鶴田，2002）。また、大学生活への不適応は抑うつや不安と関連し（田中・板山，2017）、休学や退学に至る可能性も報告されている（松高，2016）。

大学適応は入学後の環境のみならず、高校時代の学校経験の影響も受ける。大久保（2004）は、高校までの適応感が大学への主観的適応と関連することを示しており、大久保（2005）は、学校適応感の要因として居心地の良さや被信頼・受容感を挙げている。高校の学校環境を特徴づける要因の一つとして校則があり、文部科学省（2022）は校則を生徒の健全な成長を支える規律として位置づける一方で、校則の心理的影響は、客観的な厳格さよりも、生徒がそれをするように認知しているかという主観的側面が重要であることが示されている（原田，2022）。

また、大学入学を契機として新しい自己像を形成しようとする行動は「大学デビュー」と呼ばれ、中臺ら（2016）は、大学デビュー行動が友人関係満足度と関連することを示している。以上を踏まえ、本研究では、高校時代における校則の厳しさに対する主観的認知が、大学入学後の大学デビュー行動、特に積極的な対人関係行動とどのように関連するのかを明らかにすることを目的とした。

方法

大学生 57 名を対象にオンライン質問紙調査を実施した。大学デビュー行動については、中臺ら（2016）の大学デビュー尺度を用い、「積極的な対人関係」および「外見や流行への興味関心」を測定した。加えて、高校時代の校則の厳しさに対する主観的認知および、明文化されていないルールに対する主観的認知を測定した。分析には、大学デビュー経験の有無による t 検定と、積極的な対人関係を従属変数とする重回帰分析を用いた。

結果と考察

分析の結果、大学デビュー経験者は非経験者に比べて積極的な対人関係が有意に高いことが示された。一方で、外見や流行への興味関心には有意な差は認められなかった。また、高校時代の校則を厳しいと主観的に認知していた者ほど、大学入学後における積極的な対人関係が高いことが明らかとなった。これらの結果は、校則の影響が客観的な厳格さではなく、生徒の主観的な受け止め方によって左右されるとした原田（2022）の指摘と整合的である。すなわち、高校時代に抑制的な環境を経験したと認知していた学生ほど、大学入学後の自由度の高い環境において、対人関係の構築に積極的に取り組む可能性が示唆された。以上より、高校時代の校則に対する主観的認知は、大学入学後の大学デビュー行動のうち、対人的側面と関連することが明らかとなった。

家族に災害弱者を抱える大学生が感じる不安

——コミュニティが持つ力に着目して——

問題・目的

日本は地震をはじめとする自然災害が多発する国であり、災害時に特別な支援を要する人々への対応は重要な社会課題である。これまで災害弱者本人に焦点を当てた研究は蓄積されてきた一方で、日常的に支援やケアを担う家族、とりわけ大学生に着目した研究は十分に行われていない。災害弱者を家族に持つ大学生は、災害時において支援を提供する立場にあり、特有の不安や葛藤を抱える可能性がある。そこで本研究では、災害弱者を家族に抱える大学生の災害関連不安および将来不安の特徴を明らかにし、コミュニティ意識や地域参加がそれらに与える影響を検討することを目的とした。

方法

調査対象は、東海地方の大学に在学する大学生3名（男性2名、女性1名、平均年齢21歳）であり、いずれも障害や慢性疾患、要介護状態にある家族を有していた。半構造化インタビューを実施し、逐語録を作成した上で、災害不安やコミュニティに関する語りを中心に質的分析を行った。

結果・考察

分析の結果、全対象者に共通して、災害時に家族を守らなければならないという強い責任感に基づく災害関連不安が認められた。不安の内容は家族の状態によって異なり、発達障害や精神的問題を抱える家族の場合には、環境変化による心理的混乱やストレスへの懸念が強く語られた一方、身体障害や要介護状態の家族を有する場合には、移動や避難行動、医療・介護継続の困難さが主な不安要因として挙げられた。

また、対象者はいずれも防災意識自体は高かったものの、備蓄や避難計画の具体化には至っておらず、災害への認識と実際の行動との間に乖離がみられた。さらに、地域住民や自治体との関わりが比較的強い対象者では、支援が得られるという期待感や心理的安心感が語られ、不安の軽減につながる可能性が示唆された。

以上より、災害弱者を家族に抱える大学生の不安は個人の心理的問題に還元できるものではなく、家族内役割や地域支援体制と密接に関係する構造的課題であると考えられ、若年の家族支援者を含めた地域防災・支援体制の構築が重要である。

自尊感情と楽観性が運の知覚に及ぼす影響について

問題と目的

ある事象に対して、その原因を運に帰属するのか他のものに帰属するのかは人それぞれである。本研究ではどのような個人特性が運の知覚に影響を及ぼすのかについて検討をした。過去の成功体験によって運が良いという知覚と自尊感情が高まるとされていることや、自尊感情が高いと肯定的な未来展望を持つという研究から自尊感情が運の知覚に影響していると考えられる。しかし、自尊感情は運とは違う内的な要因に帰属することも考えられるので、ポジティブに物事を考えることで運を知覚しやすいと推察される楽観性を個人特性に追加し、自尊感情よりも楽観性が個人の運の知覚について影響を与えるとして検討した。

方法

Web 上での質問紙調査を行い、18 歳から 27 歳の 101 名（平均値：21.57 歳，標準偏差：1.70，男性：55 名，女性：46 名）から有効な回答を得られた。質問紙は、(1) フェイスシート，(2) エピソードごとの原因の内在性と安定性に関する項目，(3) 自尊感情尺度，(4) 楽観性尺度から構成された。

結果と考察

分析の結果，対人場面での成功体験で自尊感情が高いと，帰属する原因の内在性と安定性が高くなった。また，対人場面での失敗場面で楽観性が高いと，原因の内在性と安定性が低くなった。つまり，対人場面で成功した場合の原因は，自尊感情が高いほど原因を運に帰属しにくいことが示唆された。そして，対人場面で失敗した場合での原因は，楽観性が高いほど原因を運に帰属しやすいことが示唆された。原因を運へ帰属した場面が失敗場面であったため，運が良いという知覚に影響を与える個人特性については結果が出なかったが，自尊感情よりも楽観性のほうがより運の知覚に影響を与えるという仮説と一致した。

本研究は自尊感情と楽観性の帰属の傾向を示す一つの方法になるだろう。しかし，本研究の課題として，エピソードの種類が少数であること，原因の内在性と安定性が低いものを運とみなしているが，その他の原因の可能性があることについても考慮する必要があることなどがある。

大学生におけるメンズメイクの受容性とそれに影響を与える社会的要因について

問題と目的

近年、男性が化粧を行う「メンズメイク」は、身だしなみや自己表現の一形態として社会的に認知されつつある。SNS やメディアを通じた情報発信や市場の拡大により、若年層を中心にその実践や可視化が進んでいる。一方で、男性の化粧に対しては、ジェンダー規範や性別役割意識と結びついた否定的態度も依然として存在する。特に日本社会においては、従来の性役割意識や集団規範が、メンズメイクの受容を阻害する要因となる可能性が指摘されている。そこで本研究では、大学生・大学院生を対象に、平等主義的性役割態度、自己肯定感、周囲におけるメンズメイクの接触経験という三つの要因が、メンズメイク受容性とどのように関連するかを明らかにすることを目的とした。

方法

調査は、大学生および大学院生を対象として、Google フォームを用いて実施した。分析対象者は有効回答 119 名であった。質問紙には、中村(1991)の男性の化粧に対する意識項目、鈴木(1994)の平等主義的性役割態度スケール短縮版、田中(2023)の自己肯定感尺度に加え、周囲にメンズメイクをしている男性がいるか、またその姿を見たことがあるかといった接触経験に関する項目を含めた。

結果と考察

分析の結果、平等主義的性役割態度はメンズメイク受容性と中程度の正の関連を示し、ジェンダー観が柔軟であるほど、メンズメイクに対して肯定的な態度を示す傾向が明らかになった。また、周囲でメンズメイクをしている男性と接触している場合、受容性が高い傾向がみられ、日常的な接触が態度形成に影響する可能性が示唆された。一方で、自己肯定感とメンズメイク受容性との間には有意な関連は認められなかった。この結果は、自己肯定感が他者全体への受容的態度とは関連しうる一方で、特定の行為に対する規範的判断とは必ずしも直結しない可能性を示している。

若年女性における痩身願望と痩身理想の内在化が褒めの受け取り方に与える影響

問題と目的

近年日本では、若年女性において BMI が $18.5\text{kg}/\text{m}^2$ 未満のやせ型の割合が増加している一方、客観的には標準体型であってもさらなる痩身を望む傾向が指摘されている。こうした背景にはメディアや SNS を通じて共有される痩身理想が影響しており、若年女性の体型認知や評価基準が社会文化的要因によって形成されている可能性がある。先行研究では「痩せたい」という個人的欲求である痩身願望と、「痩せ=望ましい」という価値を自己基準として取り込む痩身理想の内在化が区別され、後者が痩身行動に強く関与することが示されている。しかしこれらの要因が体型に関する褒めの受け取り方にどのような影響を及ぼすかについては十分に検討されていない。

本研究の目的は若年女性を対象として、痩身願望および痩身理想の内在化が体型に関する褒めの受け取り方にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることである。

方法

調査対象者は 18~23 歳の女子大学生 90 名であり、2025 年 9 月に Google フォームを用いたオンライン質問紙調査を実施した。使用尺度は痩身願望尺度、痩身理想の内在化尺度、および体型について褒められた場合を想定した褒めへの態度尺度(意欲促進・褒め不信)であった。分析方法として各変数間の関連を検討するため相関分析を行い、次に痩身願望および痩身理想の内在化を中央値で二分したうえで、褒めへの態度を従属変数とする二要因分散分析を実施した。

結果と考察

相関分析の結果、痩身願望および痩身理想の内在化はいずれも褒めへの肯定的反応(意欲促進)と正の相関を示した。一方、褒め不信との間には有意な関連は認められなかった。二要因分散分析の結果、痩身理想の内在化の主効果のみが有意であり、痩身願望の主効果および交互作用は有意ではなかった。これらの結果から体型に関する褒めの受け取り方は「痩せたい」という欲求の強さそのものよりも痩身理想をどの程度自己基準として内在化しているかによって左右されることが示唆された。また本研究は、体型に関する褒めが必ずしも一様に肯定的な効果をもたらすものではなく、痩身理想を内在化した個人においては社会的承認への依存を強め、痩身行動を強化するリスクを内包していることを示唆した。

大学生における部活・サークルの入部理由と継続理由・退部理由についての調査

本研究は、大学生の部活動・サークル参加を、入部理由・継続理由・退部理由という一連のプロセスとして捉え、それらの関連性を明らかにすることを目的とした。大学における部活動およびサークルは、学生が自発的に参加・離脱を選択できるコミュニティであり、大学適応や居場所感の形成に重要な役割を果たしている。一方で、参加から退部に至る過程を、動機の変化や再評価という観点から包括的に検討した研究は限られている。そこで本研究では、大学生の課外活動参加を固定的な状態としてではなく、時間の経過とともに変化するプロセスとして捉え、動機の再構成に着目した検討を行った。

調査は、大学生 79 名を対象に質問紙調査を実施し、入部理由・継続理由・退部理由について、「活動内容」「成員（人間関係）」「緩さ（自由度・負担の少なさ）」の三側面から測定した。分析の結果、入部段階においては、部活動・サークルという活動形態の違いにかかわらず、「活動内容への興味」が最も重視されていることが明らかとなった。また、部活動所属者では「成員」に関する入部動機がサークル所属者よりも有意に高く、集団への適応や人間関係の安定性に対する期待が、入部判断において重要な役割を果たしていることが示唆された。

一方、継続理由においては、サークル所属者で「緩さ」が有意に高く、活動の自由度や時間的拘束の少なさが、活動を継続する上で重要な要因となっていることが明らかとなった。この結果は、入部時には必ずしも明確に意識されていなかった要因が、活動経験を通じて再評価されることを示しており、大学生の動機が時間的に変化・再構成される可能性を示唆している。また、継続段階では活動形態にかかわらず、「成員」や「活動内容」に対する評価も比較的高く、人間関係の質や活動満足度が継続意識を支える基盤となっていることがうかがえた。

退部理由としては、「時間がかかる」「お金がかかる」といった現実的な負担に加え、「やりがいを感じなくなった」「したかった内容と違った」といった活動評価の変化が多く見られた。これらの結果から、入部時に抱いていた期待と活動実態との間に生じたずれが、継続の再評価や退部という選択につながっている可能性が示された。

本研究の結果から、大学生の部活動・サークル参加は、入部時の探索的な意思決定から始まり、活動経験を通じて動機や価値判断が再構成され、最終的に継続または退部が選択される動的なプロセスであることが明らかとなった。本研究は、入部理由・継続理由・退部理由を連続した過程として捉える視点の重要性を示すとともに、大学生の課外活動参加を理解するための基礎的知見を提供するものである。

なぜ人は偽情報を「疑えない」のか

—大学生における認知的閉鎖欲求と社会的クリティカルシンキング志向性の検討—

問題・目的

現代の情報環境では偽情報は「信じられた」時点で終わるのではなく、共有によって露出が増え、連鎖的に影響を拡大させることから、「共有がどのように起動するのか」を含む行動面での検討が不可欠となっている。さらに、「疑うこと」が必ずしも純粋な認知過程ではなく、社会的・対人的意味づけを伴う行為である点を含んだ構造理解が必要となる。そこで本研究では、インターネットネイティブである Z 世代の大学生が偽情報に直面した際に「疑う行為」に至る心理的構造を明らかにすることを目的とした。具体的には、偽情報に対してなぜ「疑えない」のかを信頼判断・共有意図・判断保留・情報精査・情動といった複数の反応の組み合わせとして捉え、刺激の違いによって反応パターンがどのように変化するか、個人差要因が刺激別の反応をどのように規定するかを検討した。

方法

大学生を対象に Google Form を用い、質問紙調査を行ったところ 80 名（男性：33 名，女性：45 名，性別不明：2 名，年齢：平均=20.13 歳，標準偏差=1.51）から回答を得た。本研究では 3 つの異なる反応刺激（A：明らかに誤り，B：正確に見える誤り，C：正確な情報）を使用し、質問項目では（1）「疑い」に関する反応[信頼判断，共有意図，判断保留，情報精査]，（2）認知的閉鎖欲求尺度：NFC（鈴木・桜井，2003），（3）社会的クリティカルシンキング志向性尺度：SCT（中西・廣岡・横矢，2006）を尋ねた。

結果・考察

分析の結果、信頼判断は刺激の性質に応じて変動し、刺激 A で低く、刺激 B および刺激 C で相対的に高い傾向が確認された。一方、共有意図は刺激間で大きな差がみられず、全体として低値に集中する分布（床効果）が示唆された。また、精査・保留は比較的高得点側に偏る傾向がみられ、分布の歪み（天井効果の可能性）が示された。パス解析では、共有意図は情報の正誤や信頼判断に単純に追従しない可能性が示され、特に刺激 A・刺激 B においては決断力（SCT）が共有意図を正に予測するなど、共有が信頼判断とは別の行動起動性により規定されうることが示唆された。そして、これらの得られた結果から、今後の研究では情動や SNS 利用状況、情報接触媒体といった「文脈的要素」を組み込んだものへとモデルを拡張していく必要があると考察された。

“ト一横キッズ”の居場所感についての検討 ～彼らはト一横に何を求め、何を得るのか～

問題と目的

歌舞伎町にそびえたつ「新宿 TOHO ビル」の東側の路地に、多様な青少年らが集まり、独自のコミュニティを形成している。彼らは世間一般から“ト一横キッズ”と呼ばれている。彼らの中には、家庭環境を初めとする環境要因に問題を抱えており、ト一横に居場所を求めざるを得なかった者も少なくない。しかし近年、“ト一横キッズ”と呼ばれる青少年らによる逸脱行為や犯罪行為が社会問題として取り沙汰されている。この現状を踏まえて、行政が一斉補導や施設提供などの対策・支援に乗り出したが、青少年らの視点に立ちト一横を概観することなしには、問題の根本的な解決には繋がらないと考えられる。したがって、本研究では“ト一横キッズ”がト一横に心理的居場所としての側面を見出しているのではないかと仮説を立て、則定（2007）による青年版心理的居場所感尺度を枠組みとして“ト一横キッズ”がト一横をどのように捉えているかを分析する。最終的には、コミュニティ心理学の観点から、“ト一横キッズ”に対する今後の支援の在り方について考察する。

方法

本研究では研究協力者を、(1)ト一横を一週間以上、生活の拠点にしていた経験を有している方、(2)ト一横に通っていた時点で、10代もしくは20代だった方、(3)ト一横での体験を、心の安寧を以て話す事のできる方、(4)現在、ト一横を生活の拠点にしていない方、(5)研究協力者の性別や現時点での年齢は問わない、という条件のもと募った。協力のご意向を示してくださった3名の研究協力者に対して、ト一横にきた経緯、ト一横での経験した出来事や気持ちなどについて60分から120分ほどZoomによる半構造化面接を実施した。逐語分析にはナラティブ分析を用いた。

結果・総合考察

分析の結果、家庭環境や社会的な背景が原因で悩みを抱えている青少年にとってのト一横は、安心感、本来感、被受容感といった、居場所感に繋がる感覚を得られるようなコミュニティであることが明らかになった。また、今まで得ることのできなかった同質的な他者との関係性や思い出を取り戻すための場所や、辛い現実や社会規範と自己を切り離すためのシェルターとしてト一横が機能している側面も見られた。それとは対照的に、ト一横を刺激や高揚感、生きがいを得るための場所として捉えている青少年の語りも見られた。加えて、社会的背景ゆえにト一横に辿り着いた青少年が形成していた関係性には、セルフ・ヘルプ・グループの萌芽がうかがえた。社会問題とソーシャルサポートとしてのト一横を切り分けて、後者を守っていく姿勢が必要であると考えられる。

大学生の孤食に対する意識と社会不安の関連性

問題と目的

現代社会において食事のスタイルには様々なものが存在する。その中で大学生は大学生以降になると一人暮らしの選択肢が増加することによる家族との食事をする事、高校以前に存在した給食などの共食を行う機会の減少などといった他者と食事を取る機会が減少した近年では食生活や食習慣に関しての変化が起こり様々な食事体系の変化が起こっていることが示唆されている。その中で生活体系の意識の変化の中で健康上の問題として取り上げられている食事形態として「孤食」が挙げられ、自分から孤独になる傾向にあるとされる社会不安が相互関係にあると仮定し、大学生の孤食と社会不安の関連性について検討を行った。

方法

大学生(男性 51 名,女性 24 名,性別無回答 1 名)を対象に Google form を用いて調査を行った。質問紙は(1)フェイスシート,(2)大学生の食事に関する項目,(3)大学生の社会不安に関する項目,(4)大学生のメンタルヘルスに関する項目で構成された。

結果と考察

分析の結果,大学生の食意識は大学生のメンタルヘルスと弱い負の相関関係にあり大学生の社会不安傾向とは因子間に相関は存在せず大学生の食意識の高低が大学生のメンタルヘルスが低下すること,社会不安の傾向が高いことは強い有意差は存在しないという結果となった。また,共食頻度が大学生の社会不安とメンタルヘルスとの関係を一要因分散分析を用いて行った結果「共食意識」因子が,共食頻度が高い(平日が「週に 5 回」,休日が「週に1~2回」)場合に有意差があるということが分かり,孤食傾向が高い人ほど社会不安傾向にあり,メンタルヘルスが低下する傾向にあるとはいえないという結果となった。この結果について大学生は孤食を自分から積極的に行っているのではなくどちらかといえば共食を行いたいと考える傾向があり大学生の授業など予定が合わずに消極的に孤食を行う傾向にあるといえる。今後は,大学生を対象として研究を行ったが部活動やサークルを筆頭とした団体に所属している人の食事状況と社会不安についての関連について明らかになっていない。また新型コロナウイルスといった日本を含めた世界中で流行し,外出をすることを自粛した状況を経た状況下での意識の変化などがあったのか,あった場合の社会不安と食事状況に関連があるのかもまた明らかになっていない。今後は団体に所属していることの有無,新型コロナウイルスによる意識の変化の関連について検討する必要がある。

サンタクロース体験と親の養育態度が対人信頼および嘘に対する認識に及ぼす影響

本研究の目的は、幼少期におけるサンタクロース体験や、それに伴う親の養育態度が、その後の子どもの対人信頼感や嘘に対する認識にどのような影響を与えるのかを明らかにすることであった。サンタクロースという親による「利他的な嘘」が、子どもの心理的発達や親子関係においてどのような意味を持つのかを検討した。仮説として、第1に、親の養育態度が受容的で良好である家庭ほど、子ども自身のサンタクロースへの没入度が高くなると予測した。第2に、サンタクロースの正体を知った際のショックが高いと、その後の子どもの対人信頼感や嘘に対する認識は低くなるという負の相関を持つと予測した。

調査は高校生以上の男女 103 名（男性 29 名、女性 74 名、平均年齢 20.95 歳）を対象に、Google フォームを用いたオンラインによる回顧法で実施された。質問項目には、独自に作成したサンタクロース体験に関する項目のほか、親の養育態度を測る PBI (care 因子) の日本語版、嘘をつくことに対する認識尺度、対人信頼感尺度を用いた。

分析の結果、仮説の通り、親の受容的な養育態度 (PBI) とサンタクロース体験への没入度の間には中程度の正の相関 ($r = .425$) が認められた。これは、日常的に子どもに対して温かく受容的な態度をとる親ほど、サンタクロースの演出にも力を入れ、子どもがその世界観を楽しめる環境を提供していたことを示している。また、現在の対人信頼感に対しては、サンタ体験そのものよりも日常的な親の養育態度 ($r = .27$) が有意な関連を示しており、信頼形成の基盤が日々の情緒的交流にあることが示唆された。

注目すべきは、サンタクロースの正体を知った際のショック、「真実開示後の心理的葛藤」が強い者ほど、現在の対人信頼感が高いという逆説的な正の相関 ($r = .211$) が見られた点である。これは仮説とはことなる結果となった。一般的には騙されたショックは相手への不信感へとつながると考えられている。しかし、本研究においてこれは、強いショックを受けるほど親を純粋に信じていたという「基本的信頼感」の高さを反映していると考えられる。信じていた親に騙されたという葛藤を、成長とともに「自分を喜ばせようとした親の愛情」として再解釈するプロセスを経ることで、相手の背景や優しさを汲み取って信じる、より強固で成熟した信頼が形成された可能性が推察された。

さらに、サンタ体験の度合いは現在の「嘘に対する否定的認識」と関連を示さなかった。これは、子どもがサンタ体験を通じて、一般的な悪意ある嘘とは別の「相手を想うための嘘」「利他的な嘘」というカテゴリーを学習したためと考えられる。

結論として、サンタクロースの演出は親子関係や対人信頼を損なうものではなく、むしろ親子の絆を深める肯定的なイベントとして機能していた。また、その過程で経験した葛藤と再解釈は、他者の多面性や意図を理解し、その背景にある意図を汲み取ることで、対人関係においても強固な基盤が作り上げることができるのだと考える。